文学部論集　第86号（2002年３月）

「普通話水平測試大綱」について

辻　田　正　雄

〔抄　録〕

1994年10月30日、「普通話水平測試工作を展開することにかんする決定」が公布された。これによって、放送関係者や語文教育担当者などはその普通話について所定のレベルに達していることが義務づけられることになった。測試はその普通話の発音を中心に行なわれる。受験者の発音、語彙、語法が普通話の規範に合致しているかどうかが評価されるのである。「普通話水平測試大綱」はその際の問題集であり普通話の規範を示したものである。だが「大綱」を仔細に見ていくと一見瑣末なことまで規範として記されている。これは特に〝啊〟の連音変化と尖音化に対する厳格さに集中的に表われている。それは方言音ではなく普通話の語音を正しく発音することを厳しく要求するためである。その場合問題になる方言音は特に南方の語音である。「大綱」は香港等を視野に入れ、普通話の語音を強く求めるものであり、また普通話普及運動がそれが可能なまでになったことを示している。

キーワード　普通話　規範化　〝啊〟連音変化　尖音化　言語政策

1．はじめに

1994年10月30日、国家語言文字工作委員会、国家教育委員会、広播電影電視部の三者は共同で、「普通話水平測試工作を展開することにかんする決定」を発布した。

この決定は、まず普通話普及の重要性を説くことからはじめる。

「普通話を推し広めることは社会主義精神文明建設の重要な内容であり、社会主義市場経済の迅速な発展と言語文字情報処理技術の絶えまない革新によって、普通話を推し広めることはますます極めて緊迫したものとなっている[(1)]」。

そして、普及の進展を速め社会全体の普通話の水準を絶えず高めるためにこの決定を発布するのだと、その目的を明確化する。つまり、普通話は「漢語文で授業を行なう各級各類の学校

の教学言語であり、漢語で行なう各級のラジオ、テレビの規範的言語であり、漢語の映画、テレビドラマ、舞台で用いなければならない規範的言語であり、全国の党政府機関、団体、事業体等の幹部が公務活動中に用いなければならない言語であり、異なった方言地区や中国国内の異なった民族の間での通用言語である[(2)]」。

このように、普通話は社会の各レベルで必要であり、そのなかでもとりわけ教師、アナウンサー、テレビキャスター、俳優等の人たちはその職業上一定レベルの普通話が必要とされるとして、一定の範囲で普通話水平測試を行なう必要があるのだと、その主たる対象者も明確にする。つまり、「普通話水平測試は普通話普及工作の重要な構成部分であり、普通話普及工作を徐々に制度化し、規範化し、科学的なものにするための基本的な施策のひとつ[(3)]」なのである。

本稿は、普通話水平測試実施決定にともなって公表された「普通話水平測試大綱」の分析を通じて、現代漢語規範化問題ひいては中華人民共和国の言語政策を考察しようとするものである。

2.「普通話水平測試大綱」の制定

普通話水平測試を実施することは八十年代から検討されてきた。陳章太によればその主な具体的方案として次のものがある[(4)]。

① 北京市語言学会普通話等級標準研究小組《普通話等級標準条例草案》(1982年)

② 陳章太《略論漢語口語的規範》(《中国語文》1983年第6期［11月］)

③ 香港中国語文学会普通話測試研究小組《普通話水平考試大綱（徴求意見稿)》(1985年)

④ 全国語言文字工作会議主題報告《新時期的語言文字工作》(1986年。《新時期的語言文字工作》語文出版社、1987年3月、所収)

⑤ 遼寧省語言文字工作委員会《遼寧省教師漢語拼音及普通話等級考核方案（試行稿)》(1988年)

⑥ 香港考試局《普通話水平測試》(1988年)

⑦ 河北師範大学《普通話測試標準》(1988年)

⑧ 戴梅芳主編《雲南省普通話水平測試大綱》(1992年)

上記の②は三等級の標準に言及し、④で正式に一級、二級、三級という普通話の三等級の標準が提起されている。

理論面でも八十年代から研究が進められていた。その主なものとして下記の論文がある。

ⓐ 魯允中《普通話水平測試芻議》(《語文建設》1987年第3期［6月］)[(5)]

ⓑ 荘守常《中師生普通話考核標準問題的探討》(《語文建設》1987年第6期［12月］)

ⓒ 厲兵《普通話測試可行性分析》(《語文建設》1988年第4期)

ⓓ 呉積才、王渝光《普通話標準化考試的理論与実践》(《語文建設》1989年第1期)

ⓔ　宋欣橋《普通話軽声詞規範的語音依據》（《語文建設》1990年第５期）

ⓕ　荘守常《関于普通話測試標準的思考》（《語文建設》1990年第６期）

ⓖ　宋欣橋《普及普通話的語音標準框架》（《語文建設》1991年第10期）

これらの検討、研究作業は主として国家語言文字工作委員会の当時の普通話推進普及司と語言文字応用研究所のメンバーを中心としたプロジェクトチームによって進められ、1991年、《普通話水平測試等級標準》が提示された。[6] そして、1992年後半に国家語言文字工作委員会の劉照雄を中核とする「普通話水平測試大綱」検討研究チームが結成された。三、四か月かけて「大綱」のアウトラインと基本単語表が作成され、1993年３月、国家語委による学術委員会が結成され、この基本案が審議された。学術委員は王均、林濤、陳章太、于根元、詹伯慧、張頌、仲哲明、劉照雄らの中国語学者である。

これに先だって、孫修章等によって《普通話水平測試標準》や《普通話水平測試大綱》（いづれも1992年）が報告されている。[7] 劉照雄の報告は孫修章編の《普通話水平測試大綱》を修正したものということになりそうであるが、具体的経緯は不明である。

学術委員会は劉照雄を中心とした「大綱」のアウトラインと基本単語表に基本的に同意し、いくつかの意見を出した。[8]

①　漢語水平考試部が公布した《漢語水平詞彙与漢字等級大綱》の普通話（口語及び書面語）常用語と違いすぎるので、大幅に補充する必要があること。

②　単語については規範的かつ安定性あるかどうかを厳格に審議すること。

③　普通話と方言の常用語について対比すること。この点について、方言は、当初は呉方言、閩南語、閩北語、粤方言、客家方言の５方言点の対比であったが、閩南と閩北については漢字表示だけでは差異を見出し難しいので閩南語だけにし、新たに湘方言が加えられた。

④　「大綱」の名称についても検討すること。この件は結局、報告のタイトルを沿用し、《普通話水平測試大綱》が用いられることになる。

このような経緯をたどったのち、1994年10月30日、《関於開展普通話水平測試工作的決定》が下達された。そして附件として

附件一：《普通話水平測試実施辦法（試行）》

附件二：《普通話水平測試等級標準（試行）》

附件三：《普通話等級証書》（様本）

の三件を公表した。《普通話水平測試実施辦法（試行）》の第五条に、測試は《普通話水平測試大綱》に即して行なわれると記されているように、「大綱」もこの決定と同時に公表されたと思われる。現在流布しているのは、劉照雄主編《普通話水平測試大綱（修訂本）》（吉林人民出版社、1994年11月第１版）であり、本稿もこれに拠っている。単に「大綱」と言うとき、この修訂本を指すものとする。[9]

3．普通話水平測試の対象者

普通話水平測試を受験しなければならないのは、1946年１月１日以降に生まれ、満18歳以上の下記に該当するものである。

① 小学教師、中高校教師

② 中等師範学校教師及び高等教育機関文科教師

③ 師範学校卒業生（高等師範ではまず文科類の卒業生）

④ ラジオ、テレビ、映画、演劇、外国語、旅遊等の高第教育機関及び中等職業学校の関連する専門の教師及び卒業生

⑤ 各級のラジオ、テレビ放送局のアナウンサー、キャスター

⑥ 映画、テレビドラマ、新劇の俳優とテレビの声優

⑦ その他必要あると認められるもの及び希望者[10]

教育部門よりも放送関係者には高い水準が求められている。この点は広播電影電視部部長、孫家正が強調していることでもある。[11]

4．普通話水平測試等級標準

普通話水平測試は受験しなければならないものが定められているだけではなく、その従事する業務と関連して一定の等級合格という資格が必要とされている。具体的には、

① 教師と師範学校卒業生は二級または一級のレベルに達していることが求められる。また、語文の科目担当教師はその他の学科の教師よりも高いレベルが必要とされる。

② 普通話の語音教学に専門に従事している教師や、ラジオ、映画、テレビドラマ、新劇の俳優、声優といった人たち及びこれらと関連する専門の卒業生は、一級甲等あるいは一級乙等のレベルに達していることが求められる。[12]

そして、測試は中国の各地で実践を積んでいく。

たとえば、山東省では、山東省語言文字工作委員会は1995年４月及び５月に全省の中等師範及び高等師範の卒業予定者と語音教師17,470人に対して測試を実施している。測試を実施するということはそれに先立って試験官（普通話測評員）を養成しているということである。[13]

また、測試員の養成等については1999年までに養成班が25期(?)開かれ、国家級の測試員は2,000名以上、省級の測試員は14,000人以上養成されたという。[14]

また雲南者の場合は1992年から実施している。雲南省普通話水平測試中心の戴梅芳によれば、1992年12月から1996年６月までの間に、のべ137,862人について測試実施のデータが集積、整理されている。[15]

また、雲南省普通話水平測試中心測評指導組組長の盧開礫によれば、1996年末までに測評員

養成班を五期にわたって開き、測評員700人以上を養成したという。[16]

こういった実践を積んで、業務と関連して必要とされる等級の規定はより細分化され明確にされた。具体的には次の通りである。

① 師範系統の教師と卒業生

普通話のレベルは最低限二級でなければならない。そのなかでも普通話語音課の教師と口語課の教師は必ず一級に達していなければならない。

② 一般の教育系統の教師及び職業中学と口語表現と密切に関連する専門の卒業生

普通話のレベルは最低限二級でなければならない。

③ 非師範類の高等教育機関の教師及び口語表現と密切に関連する専門の卒業生

普通話のレベルは最低限二級でなければならない。

④ ラジオ、テレビ方面の教学に従事する教師

普通話のレベルは最低限二級でなければならない。

⑤ 教職資格を取得しようとするもの

普通話のレベルは最低限二級でなければならない。

⑥ 国家級及び省級のラジオ局、テレビ局のアナウンサー、キャスター

普通話のレベルは必ず一級甲級に達していなければならない。

その他のラジオ局、テレビ局のアナウンサーやキャスターのレベルについては広播電影電視部によって別に定める。

⑦ 映画、新劇、ラジオドラマ、テレビドラマ等の俳優、声優やこの方面の専門の教師や卒業生

普通話のレベルは必ず一級に達していなければならない。

⑧ その他の普通話水平測試を受験すべきもの（たとえば、公務員、弁護師、医療関係者、ガイド、解説員、公共サービスに従事するもの等）については、その到達すべき等級は地区や職業の特性によって異なるので、各省レベルの語言文字工作委員会によって確定する。[17]

その等級についても当然定められている。簡略化して言うと、それぞれ語音、語彙、語法、語調の自然さ等について、誤まった部分のパーセントによって等級が決まる。

一級甲等は誤答率３％以内、
一級乙等は　〃　８％以内、
二級甲等は　〃　13％以内、
二級乙等は　〃　20％以内、
三級甲等は　〃　30％以内、
三級乙等は　〃　40％以内である。[18]

5．試験方法

試験は5つの部分から成る。

① 単音節の漢字または単語100の音読（軽声、儿化[19]の音節を除く）。

② 二音節の単語50の音読。

③ 「大綱」に収められた朗読材料（1-50号）から任意のものを朗読する。[20]

④ 普通話と方言の語彙、語法を提示しどちらが普通話かを判断する。

⑤ あるテーマについて自由に話す。これは、語音に方言音が入っているかどうかを試験するものである。

以上の①～⑤について、それぞれ評点方法はかなり具体的に定められている。「大綱」は測試実施方法から評点規準まで記したものなのである。[21] この「大綱」に即して各地で受験参考書に相当するものが出版されている。[22]

ところが、「大綱」は規範を重視するものであるにもかかわらず、同じく規範を謳った辞書等と矛盾する箇所がある。この点について、〝啊〟の連音変化と尖音化の問題を中心に次に検討してみよう。

6．〝啊〟の連音変化

周知のように、〝啊〟は文末に用いられてその直前の音節の末尾の音素の影響を受けて変化する。その変化は、

A．連音同化による増音、つまり直前の音と連結するか、

B．連音異化による増音、つまり音の添加が行なわれるか

の二種類である。

〝啊〟の連音変化については、徐世栄が既に1958年に述べている。[23]

徐世栄によれば、Aには6種類のケースがある。

① 直前の音節の本尾がi、üの場合→yaに変化する。

② 直前の音節の末尾がu、ao、iaoの場合→waに変化する。

③ 直前の音節の末尾がnの場合→naに変化する。

④ 直前の音節の末尾がngの場合→ngaに変化する。

⑤ 直前の音節の末尾が-i［ʅ］の場合→raに変化する。

⑥ 直前の音節の末尾が-i［ɿ］の場合→s″a［za］に変化する。

Bのケースは、直前の音節の末尾がa、o、e、êの場合、〝啊〟［a］の前にiの音素が加わってyaに変化する。[24]

多くの語音教科書の類もまたこの徐世栄の説明を踏襲している。[25]

次に「大綱」の朗読部分で〝啊〟が出現する箇所について見てみよう。「大綱」は〝啊〟の連音変化にすべて注音しているが、次の通りである。

作品２号	唱啊	chàng	nga
〃	是啊	shì	ra
〃	样啊	yàng	nga
作品10号	雪啊	xuě	ya
作品20号	心啊	xīn	na
作品23号	遭啊	zāo	wa
作品25号	次啊	cì	a
作品27号	回啊	huí	ya
作品40号	人啊	rén	na
作品41号	美啊	měi	ya
作品42号	歌啊	gē	ya
〃	桥啊	qiáo	a
作品45号	怪啊	guài	ya
作品47号	近啊	jìn	na

上記で判るようにほとんどすべて徐世栄ほかで説く「〝啊〟の連音変化」に従っているが、作品42号の〝～桥啊〟と作品25号の〝～次啊〟だけがそうではない。作品42号の〝～桥啊〟の場合はゆっくり力強く朗読する箇所あり、〝～qiáo a〟が妥当と思われるが、作品25号の場合はどう考えればよいのだろうか。〝啊〟の連音変化について規範を記しているとされる辞書等の記述を見てみよう。

ⓐ《現代漢語詞典　修訂本》商務印書館、1996年７月修訂第３版

前の字の韻母または韻尾	〝啊〟の発音
a、e、i、o、ü	a→ia
u、ao、ou	a→ua
-n	a→na
-ng	a→nga

ⓑ　李行健主編《現代漢語規範字典》語文出版社、1998年１月

前の字の韻母または韻尾	〝啊〟の発音
a、e、i、o、ü	a→ia
u、ao、ou	a→ua
-n	a→na

基本的にⓐと同じであるがngaとなる連音変化は記していない。

ⓒ《普通話異読及音変詞語手冊》湖北教育出版社、2000年10月

ⓐに従う。

語気詞〝啊〟の連音変化は本来的には北京語音の特徴である。[26] たとえば、n＋a が na となるのは、an、en、in、un、ün のいずれも発音の最後は舌尖が上の歯のつけねにくっつくことによる連音変化である。しかし一部の方言ではそうでない。たとえば陝西西安の方言音では〝en〟は鼻化音であり舌尖は口の中ほどにあるので〝你这个人呀！〟というふうに〝ren ya〟となる。これは北京音では考えられないことである。[27]

〝啊〟の連音変化については、最近の説明では「荘重な場や正式の場、たとえば朗誦する時には、/a/と読む方がよいが、日常生活のなかでは/ia/等（連音変化）と発音されることが多い」[28]とされる。

そうであるならば「大綱」の朗読部分にわざわざ連音変化の注音をつける必要はないはずである。それがわざわざ注音がつけられているのは、受験者の朗読のその直前の音の発音が方言音かどうかを問題にするためであると思われる。[29] そして［za］については、［za］の［z］は［s］の濁音であるが弱く発音されるため［a］に近い発音である。そのためⓐ～ⓒでも言及されていないし「大綱」でも特に問題にされていないのであろう。[30]

7．結語

「大綱」には一見瑣末に思えることまで規定されており、測試科目の朗読の発音がこの規定に合致していない場合は減点されるのである。

宋欣橋《語音評定参照細則框架》は、語音評定の基本類型を挙げ、測試員が語音評定にあたって参考にすべき枠組みを明らかにしている。[31] 主なものを例記してみる。

○舌尖後音（zh、ch、sh、r）を舌尖前音（z、c、s）に読むのは語音の誤まり。その逆も同じ。(1. 1. 1、1. 1. 2)

○寛窄（つまり舌位の移動の幅の大小、及び口形に伴なう開合）の問題。たとえば、韻頭、韻尾の寛窄であるのは誤まり。つまり、ai→ei、ao→ou、ia→ie、ua→uo、iao→iou 等に読むのは語音の減点対象となる。(2. 1. 11)

○-n と-ng の区別。(2. 1. 14、2. 1. 15)

また語音の欠陥として次のような例も挙げられている。

○ou［əʊ］の発音を［ɛʉ］としたり、iou［iəʊまたはiʊ］の発音を［iɛʉ］に近い音とすることは、正しい語音とは言えない。(2. 2. 14)

その他、拼音表記の音の区別にも厳密である。たとえば、a［A］、ai［aI］、ao［ɑu］、ia［iA］、ua［uA］、iao［iɑʊ］、uai［uaI］、an［an］、ang［aŋ］、ian［iæn］、uan［yæn］等にみられる〝a〟の部分の語音の区別についても、前a［a］、央a［A］、後a［ɑ］の違いを説

いている。

宋欣橋は「大綱」の朗読部分の語音提示で〝啊〟の連音変化の規則に従わない発音、たとえば一律に〝ya〟と読むのは誤まりとする。これはＡＢＢ式形容詞や軽声の扱い（4. 3. 1、4. 3. 3）に比べてかなり厳しい。[32] ABB 式形容詞や軽声について規定がゆるやかであるのは、ともに規範とされる「大綱」と《現化漢語詞典》の記述が不一致であるためであろうが、言語の基本である語音について、測試対象者に普通話の語音体系を確実に習得することを求めているためであろう。ただ［a］［A］［*a*］の区別や［-n］の鼻化音にみられるように、わずかな語音の違いはふつうほとんど意識されない。また評点についてもコンピュータを使って識別するといっても、全国各地で実施するのは困難だろう。そのおそらくは方言差に起因するであろう差異は、ただ〝啊〟の連音変化の時に規則に従わない音となって出現することになる。そうしてみると〝啊〟の連音変化をわざわざ注音して語音提示してあるのは、語音の〝啊〟の連音変化だけではなく、全体の語音に方言音が入っているかどうかをみるものであると言えるだろう。

普通話水平測試が普通話の正確な語音を要求する以上、方言音が問題にされるのは当然として、では、何故特に尖音の問題が提起されるのだろうか。

尖音の問題といっても尖音と団音の区別が問題というだけではない。[33] 尖音と団音については普通話について限定し戯劇界での問題は除外している。[34]

尖音問題とは単に［tɕ］［tɕ‘］［ɕ］が［ts］［ts‘］［s］と読まれることを指すばかりでなく、［tɕ］［tɕ‘］［ɕ］の発音部位が前移する現象も指す。

普通話の舌面塞擦音発音部位が前移する問題について、朱秀蘭は1999年末、北京市、河北省石家荘市及び河北省涿州の三地区の学校、工場で調査を行なった。[35] それによれば擦音の前移が最も多いという。つまり尖音の問題といっても、

新［ɕin］→［sin］

学［ɕyɛ］→［syɛ］

のように発音される傾向が見られるという。以前にも北京の女子学生にこのような傾向が見られたことがあるが自然と消滅してしまった。現在のこの傾向は単に北京だけでなく他の地区にも広がっている。この［ɕ］を［s］の如く発音するのは方言の影響であり、しかもその方言は南方のものである。《漢語方言詞彙》によって一例を示してみる。[36]

	青	清	新
北　京	tɕ‘iŋ	tɕ‘iŋ	ɕin
蘇　州	ts‘iŋ	ts‘in	sin
広　州	tʃ‘ɛŋ	tʃ‘iŋ	ʃɐn
福　州	ts‘aŋ	ts‘iŋ	siŋ

一般に、言語は経済的、文化的に高いレベルにあると認識されるところの発音は模倣される。この［ɕ］→［s］は香港などのテレビキャスターやディスク・ジョッキーの発音を模倣した

と考えられる。

普通話水平測試は、1955年の現代漢語規範問題学術会議以来のおよそ40年にわたる規範化工作の成果であるだろうし、これによってかなり細かな規範を明示しうる段階にまで到達したことを示しているだろう。あるいは清末からの語文運動の一到達点を示していると言ってもよいかもしれない。「大綱」はその細かな点まで測試の正誤として規範を示すことによって、香港等を視野に入れ普通話の語音を強く求めるものであり、また普通話普及運動がそれが可能なまでになったことを示している。

〔注〕

(1) 国家語言文字工作委員会、国家教育委員会、广播電影電視部（国語［1994］43号）《関於開展普通話水平測試工作的決定》（《語文建設》1994年第12期）。

(2) 注(1)に同じ。

(3) 注(1)に同じ。この部分は教育部語言文字応用管理司編《推广普通話宣伝手冊》（語文出版社、1999年７月）でも強調されている。

(4) 陳章太《論普通話水平測試等級標準》（《語言文字応用》1997年第３期［８月］）に拠る。②、④以外は未見。

(5) 魯允中はこの論文で、建国以来何度も測試実施が試みられてきたが成功しなかったと述べている。

(6) 劉照雄《〈普通話水平測試大綱〉的編制和修訂》（《語言文字応用》1997年第３期）。

(7) 孫修章《〝普通話水平測試標準〞的研制与実践》（《語言文字応用》1992年第１期［２月］）。また、この「普通話水平測試標準」検討研究チームは孫修章と于根元が責任者で、その他に曹澄方、宋欣橋、魏丹、姚佑椿が構成メンバーである。

(8) 注(6)に同じ。

(9) 1996年初、国家語委の指導部が変わり、1997年初、「大綱」の修訂が行なわれた。この修訂の具体的内容は不明であるが、1994年の「大綱」と大きくは違わないものと思われる。注(6)を参照。

(10) 《普通話水平測試実施辦法（試行）》第十一条。

(11) 孫家正《深入做好推广普通話工作是广播、電影、電視工作的重要責任（1995年11月27日在第四期国家級普通話水平測試員資格考核培訓班上的講語）》（《广播電視語言文字規範化集》北京广播学院出版社、1996年８月、Ｐ.８）。

(12) 《普通話水平測試実施辦法（試行）》第十二条。

(13) 張家芝、韓少華（山東省語委辦）《一次普通話水平等級測試的実践》（《語文建設》1995年第10期）。

(14) 宋欣橋《普通話水平測試員実用手冊》商務印書館、2000年８月、Ｐ.278。

(15) 戴梅芳《試論普通話水平測試的信息反饋作用》（《語文建設》1997年第２期）。

(16) 盧開礦《雲南普通話水平測試的回願与思考》（《語文建設》1997年第５期）。

(17) 《国家語言文字工作委員会関於普通話水平測試管理工作的若干規定（試行）》（1997年６月26日）第二十一条（《語文建設》1997年第12期）。

(18) 《普通話水平測試等級標準（試行）》（国家語言文字工作委員会等合編《普通話水平測試的理論与実践》商務印書館、1998年９月。Ｐ.202～Ｐ.203）。

(19) 儿化の問題は、この「大綱」に関連して議論されている。林宝卿は《普通話的儿化》で次のように述べている：对一些具有語法意義、表示感情色彩的儿化詞和書面語有時儿化、有時不儿化、口語詞一般儿化的詞、如小鳥儿、這儿、那会儿、一会儿、一塊儿、大伙儿、心窩儿等也要掌握它、因為這是関係到普通話説得好不好的問題（《語言文字応用》1992年第４期［11月］所載）。

(20) 語音の判定について、たとえば、尖音、合口呼零声母、入声等々とその評定参照規準がかなり詳しく定められている。しかし語音の判定はどうしても測評員の主観に左右されやすい。そこで〝IBM Via Voice 漢語語音輸入系統〟に依拠していることが報告されている――（雲南省普通話培訓測試中心）王渝光《普通話水平測試題庫的質量評析与改進》（《語文現代化論叢》第４集、北京大学出版社、2000年６月）。また、《普通話水平測試題庫建設的理論与実践》（《語文現代化論叢》第３集）を参照。

(21) 《普通話水平測試大綱・総論》（劉照雄主編《普通話水平測試大綱（修訂本）》吉林人民出版社、1994年11月第１版。2001年２月第８次印刷。Ｐ.6～Ｐ.9）。

(22) 主なものを次に記す。

ａ．陳旻等編著《普通話水平測試教程》東南大学出版社、1997年８月。

ｂ．北京市語言文字工作委員会編《普通話水平測試指南》京華出版社、1997年８月。

ｃ．崔振華等主編《普通話水平測試応試訓練教程》湖南師範大学出版社、1998年３月。

ｄ．湯力文編著《普通話水平測試習題集（粤語区）》北京大学出版社、1998年４月。

ｅ．湖南省語委辦等編《湖南・普通話訓練与測試》語文出版社、1999年６月。

ｆ．姚喜双等編著《普通話水平測試（ＰＳＣ）指南》中国广播電視出版社、2001年１月。

ｇ．浙江省語言文字工作委員会編《普通話訓練与測試》浙江攝影出版社、2001年４月。

(23) 中国語学研究会編『中国語学新辞典』（光生館、1969年）の「連音変化」の項に文末語気助詞「啊」の変化の説明があり、徐世栄《普通話語音講話》（文字改革出版社、1958年）が参考資料として挙げられている。

(24) 徐世栄編著《普通話語音常識》語文出版社、1993年10月第１版、1999年１月第２版。但、この〝啊〟の連音変化について第１版と第２版に大きな違いはない。

(25) 主なものを次に記す。

ａ．朱道明主編《普通話教程（修訂本）》華中師範大学出版社、1998年８月第２版、Ｐ.111。

ｂ．杜青《普通話語音学教程》中国广播電視出版社、1999年４月、Ｐ335。

ｃ．馬顕彬等編著《普通話基礎》暨南大学出版社、2000年10月、Ｐ.153。

(26) 李平《再談語气詞〝啊〟的音変規律》（《語言文字周報》2001年７月４日）。

(27) 李平《答読者問》（《語言文字周報》2001年１月31日）。

(28) 劉月華等《実用現代漢語語法（増訂本）》商務印書館、2001年５月、Ｐ.415。但、この部分、旧版にはない。cf、劉月華等《実用現代漢語語法》外語教学与研究出版社、1983年４月、Ｐ.241。

(29) 〝啊〟の連音変化の問題についてはさらに音声資料の検討が必要であろう。今後の課題である。様板＝規範という点から、分析すべき音声資料として次のものが考えられる。

ａ．（革命様板戯）《智取威虎山》（1970年、北京電影。ＶＣＤ版＝以下同様）

ｂ．（〃）《紅灯記》（1970年、八一電影）

ｃ．（〃）《沙家浜》（1970年、北京電視台）

ｄ．（〃）《紅色娘子軍》（1972年、八一電影）

ｅ．（〃）《奇襲白虎団》（1972年、長春電影）

ｆ．（革命現代京劇＝等二批様板戯）《海港》（1972年、北京電影等）

ｇ．（〃）《龍江頌》（1972年、北京電影）

ｈ．（〃）《杜鵑山》（1974年、北京電影）

ｉ．（〃）《磐石湾》（1976年、北京電影）。

また、老舎《茶館》（1979年、北京人民芝木創院上演）の録音テープに基づいて、〝啊〟の連音変化に言及したものに下記がある。

○武永尚子「《茶館》における語気助詞」『語学教育研究論叢』第２号（大東文化大学、1985年）。

(30) -i［ʅ］＋a は連音変化されることが少ないことの他に s″a（徐世栄）という拼音がなく、［za］は拼音の za［tsa］と混同される可能性があることも原因と考えられる。

(31) 宋欣橋編《普通話水平測試員実用手冊》商務印書館、2000年８月、Ｐ.139。

(32) ABB 形容詞の変調や軽声については、別稿で考えてみたい。

(33) もちろん尖音と団音の区別が特に問題となる方言はある。注(22)P.30には、普通話では同音だが、方言で尖団を区別している語（清 ── 軽、小 ── 暁など）が練習問題として掲げられている。

(34) 尖音と団音については、高更生等主編《現代漢語知識大詞典》（山東教育出版社、1992年第1版）P.460を参照。

(35) 朱秀蘭《関於普通話声母 tɕ tɕ' ɕ 発音部位前移的調査和思考》（《語言文字応用》2000年第4期［11月］）。

(36) 北京大学中国語言文学系語言学教研室編《漢語方言詞彙（第二版）》語文出版社、1995年6月。

付　記　　本稿は、平成13年度佛教大学特別研究費の助成による研究成果の一部である。

（つじた　まさお　中国語中国文学科）

2001年10月17日受理